

日本統治期の台湾における観光と心象地理

神田 孝治

- I はじめに
- II 南の心象地理と日本人の台湾へのまなざし
- III 台北市の差異化された心象地理
 - (1) 洋風都市の城内
 - (2) 本島人街の大稲埕と萬華
 - (3) 始政四十周年記念台湾博覧会と心象地理
- IV 台湾の国立公園の風景と心象地理
 - (1) 台湾の国立公園の選定過程
 - (2) 第一回台湾国立公園委員会での議論
 - a 3候補地の選定理由
 - b 国立公園の数の問題 [提案1]
 - c 南部地方の熱帯景観について [提案2]
 - (3) 台湾の国立公園の心象地理と国家・観光・自然保護
- V 観光都市の嘉義と心象地理
 - (1) 嘉義市の観光都市化への動き
 - (2) 内地への郷愁と日本人の心身
- VI おわりに

キーワード：台湾、植民地、日本(人)、観光、心象地理、台北市、国立公園、嘉義市

I はじめに

サイード (Said, E.) が著書『オリエンタリ

ズム』⁽¹⁾において、西洋人による東洋という心象地理 (imaginative geographies) の生産について論じて以降、帝国主義の時代において植民地を旅した西洋人旅行家の紀行文の分析による、心象地理の研究が盛んになってきた⁽²⁾。「他なる場所の人、景観、文化、自然の表象」⁽³⁾である心象地理には、まなざして支配する主体としての西洋、観られ従属する他者としての東洋などといった、権力の問題が密接に関わっている。そこで、特に (ポスト) コロニアル研究において、植民地支配を正当化し従属する人々の属する空間を創造する言説装置⁽⁴⁾、言い換えれば「帝国の文体論」⁽⁵⁾を明らかにするものとして、紀行文に、そしてそこに描かれる心象地理に関心が寄せられたのである。さらに、心象地理は、紀行文の著者の抱くファンタジーや欲望が投影されたものであるため、アイデンティティの構築の問題など、著者の属する文化を研究する際にも注目されるものであった⁽⁶⁾。

本稿で取り上げる台湾も、オランダ (1622—1661年)、スペイン (1626—1642年⁽⁷⁾)、鄭成功創設の鄭氏王朝 (1661—1684年)、清 (1684—

(1) サイード, E. (今沢紀子訳) 『オリエンタリズム』、テオリア叢書、1986。
(2) 代表的なものとして、Duncan, J. and Gregory, D., eds., *Writes of Passage: Reading travel writing*, London: Routledge, 1999. がある。
(3) Gregory, D., 'imaginative geographies' (Johnston, R.J., Gregory, D., Pratt, G. and Watts, M., eds, *The dictionary of Human Geography: Forth edition*, Blackwell, 2000), pp.372-373.

(4) バーバ, H. (富山太佳夫訳) 「他者の問題—差異、差別、コロニアリズムの言説」(富山太佳夫編『文学の境界線』、研究者出版、1996) 167—207頁。
(5) Pratt, M.L., *Imperial Eyes: Travel writing and transculturation*, London and New York: Routledge, 1992.
(6) Duncan, J. and Gregory, D., 'Introduction' (Duncan, J. and D. Gregory., eds., *Writes of Passage: Reading travel writing*, London: Routledge, 1999), pp.1-13.

1895年)、日本(1895—1945年)といった外部による支配にさらされ続け、ポルトガル人による「フォルモサ(華麗の島)」の呼称をはじめとして、「(小)琉球」、「東蕃」、「高砂」、「東都」などと⁽⁸⁾、時に憧れや侮蔑の意味が込められつつ様々な名称が与えられ、まさに支配されまなざされるべき他所として幾重にも心象が投影され続けた場所であった。なかでも、50年間も台湾を統治した日本人は、植民地というシステムを下支えする文化的権力にもなりうる、様々な台湾の心象地理を生産していたことを確認する。そこで本稿では、日本人の台湾の心象地理に注目することで、日本による台湾統治における文化的権力と、当時の日本人の文化、特に地理的な想像力やアイデンティティに関する問題について考察することにしたい。

また、近年の議論では、心象地理が、主体の属するホームとは全く反対の他所としてステレオタイプ化されるのみでなく、アンビバレントであったり⁽⁹⁾、ホームとアウェイの要素が混じり合った異種混濁的なものである⁽¹⁰⁾、といったより複雑な様相が指摘され、その理由や意義に関心が向けられている。さらに心象地理とは、単なる表象としてのみ考えるべきものではなく、物理的空間と密接な関係を有するものであるという点もしばしば強調され⁽¹¹⁾、その相互関係も考察されるようになってきている。

そこで、これらの点を考えるにあたり、本稿では観光という現象に注目し、特にその空間性に焦点をあてて考察することにしたい。観光の空間は、しばしば議論されるように、両義性や異種混濁性をその空間の特徴とする上、表象の

空間であると同時に物理的空間であり、かつ資本主義、ナショナリズムなどのイデオロギーといった諸々の条件が関係する空間、まさに多様な人、モノ、次元の「出会いの空間」である⁽¹²⁾。そのため、心象地理の複雑性、異種混濁性を理解すると同時に、その他の様々な事象との連関を検討するにあたり、有効な視点であると考えられるのである。そこで本稿では、台北市、国立公園、嘉義市といった具体的な観光の空間における心象地理に注目するなかで、台湾の心象地理に投影された欲望やイデオロギー、物理的空間との関係性、その多様性と相互関係、といったものを明らかにし、その上で観光が負った台湾植民地統治における役割についても検討することにした。

II 南の心象地理と日本人の台湾へのまなざし

由来、気候学的に見た白人は熱帯地に永住する肉体的な適応性を欠いてゐるといはれる。しかも、熱帯地方に永住できないといふ北方系の白人が、どうしてこんなに熱帯を憧憬し、熱帯に魅惑されるのであらう。しかもかうしたはげしい魅力が、単に画家や文学者にのみよつて感じられてゐるのではないところに、イタリアやスペインよりも、オランダやイギリスやフランスをして、南方に進出せしめるに至つた大きな原因があるのではなからうか。

熱帯！そこは太陽の光と熱とが支配する世界であり、未開人の伝説と未知の自然がかくされた神秘境であつた。それは同時に海洋によつて囲まれ、海に船出する者を惹きつける浪漫であり、冒険であり、夢想であつた。

(7)この期間は、スペインが台湾北部を、オランダが台湾南部を統治していた。

(8)伊能嘉矩『台湾史 巻一』文学社、1902。

(9)前掲(4)参照。

(10)Duncan, J., 'Dis-Orientation: On the shock of the familiar in a far-away place' (Duncan, J. and D. Gregory., eds., *Writes of Passage: Reading travel*

writing, London: Routledge, 1999), pp.151-163.

(11)前掲(6)参照。

(12)詳細は、以下の拙稿を参照。神田孝治「観光、空間、文化—観光研究の空間／文化的転回へ向けて」(橋爪紳也・田中貴子編『ツーリズムの文化研究』、京都精華大学創造研究所ライブラリー、2001) 27-70頁。

1942（昭和17）年に『台湾風物誌』⁽¹³⁾を著した春山行夫は、「熱帯」と題した序文において、上記のように白人の熱帯への憧れの強さを指摘している。そして「台湾は私にとって、ながいあひだ南方的自然に飾られた数枚の異国的な風景絵葉書であった」という彼は、白人の熱帯への憧れのまなざしを介して、台湾への憧憬を語り、台湾へと出航していく。このように（亜）熱帯地域に位置する台湾を紹介する紀行文においては、春山の如く、時として西洋人のまなざしを介しつつ、南への憧れを論じるものが多かった。1928（昭和3）年に国立公園調査のために台湾を訪れた田村剛も、ハワイのイメージを投影することで、台湾を熱帯の楽園として想像していた。

嘗て渡米の途次ハワイに上陸して、その空、その海、その動植物、その他の風物悉くが、南国特有の強烈な光や色や香に濃く色付けられて、吾々の地上で想像し得る限りの、所謂パラダイスそのものを実現しているのを見た時、機会があったら重ねて遊びにきたいものと沁みじみ思った事があつた。…私の推定する所に依ると、ハワイに酷似する気候風景等を有するものを我が領土内に求めるならば、それは正しく台湾島であらねばならぬ⁽¹⁴⁾。

しかしながら、このような憧れの南の熱帯地域という心象地理は、当時の日本人にはあまり想像されていなかったことも、春山は指摘している。

我々の、特に文学の世界では北方のみが多くの場合に主題となってきた。「詩人や博物学者は僅か

一呎平方の芝生のうちにも熱帯林の姿を想見する」とジョン・ラボックは書いているが、そのやうな南方に対する想像力は、今までの我我には欠けてゐるのではないだらうか⁽¹⁵⁾。

彼は、このような日本人の南方に対する無関心について、北進という当時の日本の政治的状況があったことと同時に、台湾が「久しい間『毒蛇と蛮人とマラリア』の巢窟のやうに国内に伝へられるにいたつた」ことを、そしてその心象が払拭されないのは「わが国人がいままで経験しなかつた南方発展の障害に、はじめて直面したといふ現実の問題が、横たはつてゐたこと」を論じている。マラリアや毒蛇といった熱帯特有の病や生物、そして当時高砂族や蕃人と呼んでいた原住民の抵抗、いわゆる「蕃害」により、台湾統治初期に多くの死傷者を出したことがメディアを通じてしばしば報じられ、台湾に、さらには南方に、身体的恐怖の心象地理が喚起されたというのである。大正、昭和初期に刊行された台湾の観光案内の多くも、既に毒蛇と蛮人とマラリアの巢窟ではなくなったのだと、その心象の打ち消しで書き出されることが多く、このような身体的恐怖の心象地理が流布していた状況が伺われる。実際に訪れる観光客についても、1927（昭和2年）の記事⁽¹⁶⁾において、同じく日本の植民地として1910年に併合された朝鮮と1919年以降関東軍に実質支配されていた満州がそれぞれ年1万人近くあるのにもかかわらず、台湾はその半数にも満たないと報じており、日本人にとっての南、もしくは台湾の魅力の薄さが伺われる⁽¹⁷⁾。

(13) 春山行夫『台湾風物誌』生活社、1942。

(14) 田村剛『台湾の風景』雄山閣、1928。

(15) 前掲(13)参照。

(16) 生野園六「国際的観光地としての台湾」、台湾鉄道179、1927、83-86頁。

(17) もちろんこのような背景として、日本において観光旅行熱が高まった1910年代から30年代にかけて、戦争もしくは統治が始まった朝鮮、満州と、それ以前の台

湾、という時期のズレを考慮する必要があるだろう。すなわち、戦争報道や統治後すぐに盛んになされる植民地紹介といった、様々なメディアによってなされる情報の伝達が、日本人の当該植民地の心象地理を形成すると同時に、そこへの関心を高め、より観光の欲求を強めたと考えられるからである。特に満州は、1915年の21ヶ条要求から1932年の傀儡政権である満州国建国へと、長期に渡り日本人の関心を集め続ける要素を

このように、日本人にとっての南の心象地理、そして台湾の心象地理は、白人にとっての熱帯が、「肉体的な適応性」という問題含みの心象地理と、魅惑的な心象地理のアンビバレントなものであったように、魅力と恐怖というまさに両極のアンビバレントな心象地理であったといえる。しかしながら、白人のそれと比べると、その熱帯との関わりの経緯から、身体的恐怖という負の心象地理が強調されていたのであり、また南への関心そのものもさほど高くはなかった。そして、春山が「事変後、南方に対する関心は急速度に高められた」というように、昭和二ケタ中盤から政治経済的に南方に目が向けられた、いわゆる「南進」の声と共に、多くの日本人も南に対する地理的な想像力を膨らませ、台湾に対して、魅惑的でエキゾティックな南の心象地理を投影する言説が増加するのである。

図1 台湾の都市及び観光地位置図

Ⅲ 台北市の差異化された心象地理⁽¹⁸⁾

駅前の広場を通り越すと、棕櫚の並樹がアスファルトの広い道を美しく飾つてゐるのを見る。そこにホテルの赤い煉瓦が高く聳えてる。

「これや文化的だぞ。」

続いて、

「台湾へ来た筈だが。」

とつけ加へる。

1931(昭和6)年発行の紀行文『台湾見物』⁽¹⁹⁾において、板垣邦器はこのように台北市(図1及び図2参照)に着いた際の驚きを記している。マラリア等の恐怖の心象地理を有していた台湾とは正反対の文化的空間。台湾へ訪れる観光客の多くが、基隆港に着いた後で最初に訪れるこ

↘ 有していたといえる。

(18)本章の内容は、神田孝治「南国都市の亡影」、自然と文化69、2002、22-31頁。において紹介した台北市の心象地理の問題を、内地からの日本人観光客の視点

圖 示 示 示 示

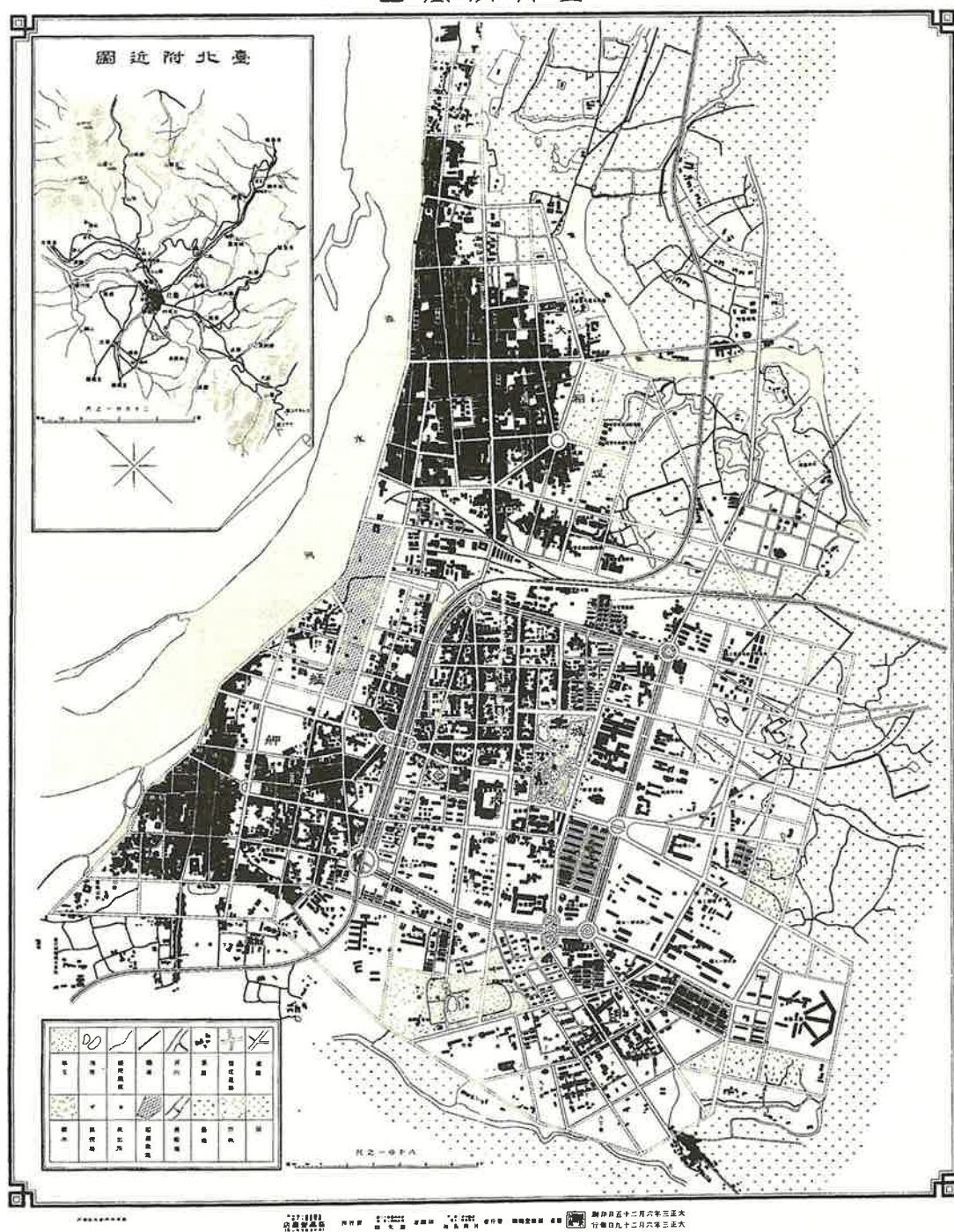




図3 城内の絵葉書

注：台湾総督府とその周辺部分。

がアーケードを連ねていることも亦、市街の美観を添へる上に、大いに役立っている。のみならず、内地には見られぬ程の立派な並木が植ゑ連ねられてゐて、これも有力な装飾となつてゐる。パリ―市街と同じやうに城壁を取壊して造つたといふ、三線道路の如きは、二列の植樹帯を伴つて、中央市街を一周してゐる。これは正に立派な公園広路である。城門の一部をそのまま保存してゐるのも床しい。総督府はこのヨーロッパ風の中央市街の真中に在つて、高い塔を戴く五階造り宏大な大建築で、外観上からも全島を支配する程の威儀を備えてゐる。

田村によって「ヨーロッパ風の中央市街」とされたのは、清の統治時代に台北府の知府であつた陳星聚が城壁の設営を始め（1880年）、巡撫の劉銘傳が「興市公司」と呼ぶ建物会社を創設（1885年）して近代的町作りをはじめた、旧台北城内の範囲であつた。この地域は、民政長官の後藤新平の下で台北城内市区計画が発表（1899年）されてからは、市区改正による近代的都市空間形成が漸次推進され、「煉瓦、石造の大厦高楼」が「欧風を加味して建築」されて、「近代文明都市として他に多く比類を見ない立派な外観」となつたことが指摘されていた⁽²¹⁾。また台北城の城壁は、東・北・南・小南門を除いて

市区改正に伴い取り壊され、その跡に創設された「市街を包囲」する「リング・ガーデン」こと三線道路については、「散歩道を設け處々に円形若くは小公園を配し、その瀟洒たる感じから東洋の小巴里の称さへある」⁽²²⁾といわれていた。当時の日本人が著したある書物では、この変化を「支那式城廓都市」が「欧米式並木大馬路都市」になつたのだと讚美している⁽²³⁾。

このように、「ヨーロッパ風」の心象地理が台北市の景観から想起され、強調された理由には、「ヨオロッパの古典的な都市景観で、内地では見られない」⁽²⁴⁾と先の春山が言うように、台北市が都市計画の実験場として日本で最も早く市区改正がなされたがため、日本本土（内地）に見られない珍しい洋風景観をなしていたことがある。田村が「全島を支配する程の威儀を備えてゐる」といった「近代復興式五層楼で市内何れの所よりも望見し得られる」⁽²⁵⁾とされた台湾総督府を中心に据えたヨーロッパ風の中央市街とは、彼がそこを「欧州に押し出しても、第二流には下るまい」と評したように、欧米列強と肩を並べて最初の植民地である台湾を統治しようとした帝国日本の意図が色濃く反映された空間だったのだと考えられる。官吏が多かつたとされる台北市在住の内地人の多くは、このヨーロッパ風の近代的都市空間にその多くが居住していたのであり、内地からの日本人観光客も、台湾総督府直営の鉄道ホテル等、台北市においては多くがこの城内のホテルに滞在していたことを述べている。すなわち城内とは、西洋と肩を並べ植民地を統治する主体としての日本人が属する空間だったのであり、そこに投影された「ヨーロッパ風」の心象地理は、そのような日本（人）のアイデンティティを確認する起点となつていたといえよう。

(21) 台北市役所『台北市政二十年史』台北市役所、1940。

(22) 前掲(21)参照。

(23) 林肇『台湾を語る』殖民時代社、1933。

(24) 前掲(13)参照。

(25) 前掲(21)参照。

(2) 本島人街の大稲埕と萬華

台北の町には劃然たる二つの区分がすぐと認められる。それは官衛街と、商店街とであり、同時に新日本と旧台湾とである。何時の日になつたつてこれが融和すべくも見えない。今僅かに残つて一つの城門はこの二つの異つた世界の境界標である。

...

商店街へ出て来る。台湾人計りで営んでる大稲埕へ行つて見る。一種の臭ひが鼻を打つ。それは建物から来たのだらうか——煉瓦造りのじめじめした薄暗い建物からなのだらうか。生豚からの臭ひだらうか。それとも人間から、生きた、そしてにんにくを食べてる人間からの臭ひだらうか。纏足をした女が危ぶなかしげな腰つきで通る。それは凡てが貴婦人な筈がない。美しい布で飾つた小さい纏足が昇つて行く階段の上に営む彼女達の人生はどんなものか。「処女なれば三夜にして三千圓を費やす真に忌むべき悪風といふべし。」と台湾風俗誌が教へてる。さうした臭ひもこの特異な臭気に握綿してるのであらう。

城門外の萬華と大稲埕とは純支那式の本島人街です。

...

「大稲埕に行くと、此節は本島人は鼻息が荒いから下手にまごまごしてゐると、ひどい目に合はされますよ」と或る人の言葉を思ひ出して、ぞつとします。

...

家の周囲には庭木一本もない。赤い今でも焼きついて居る様な赤煉瓦が妙にイライラさせられ、支那くさいにほひが鼻について、何となく不規則な収まりのない騒々しさが何処迄も支那街らしく感ぜさせられます。

前者の引用は、先の板垣⁽²⁶⁾によるものであり、後者は1933（昭和8）年に紀行文『女性に映じたる蓬萊ヶ島』⁽²⁷⁾を著した高橋鏡子のもの



図4 大稲埕の絵葉書

である。このように内地からの日本人観光客によって差別的な表象がなされた大稲埕とは、城内北側の淡水川沿いに広がる地域（図2中央上及び図4参照）であり、そこは1860年代後半から台北北部で茶業が発達したことを背景に、茶を中心とする国際的な貿易港として発達していた。台北市の人口は、1932（昭和7）年末段階⁽²⁸⁾で、先の日本から来た「内地人」約7.7万人と、漢民族の「本島人」約17.5万人によってほぼ構成されていたが、大稲埕に居住していたのは多くがこの本島人であった。ここで、台湾全土の人口構成を考えると、同じく1932年末段階で、台湾の全人口が約490万人、そのうち1620年代以降主に福建省から移民してきた漢民族の本島人が約445万人を占め、残りが内地人約25万人と、インドシナ系やマレー系人種からなる原住民の「蕃人」約20万人であった。すなわち、植民地支配を受けていた現地人の大部分を構成する本島人の属する空間がこの大稲埕であり、そこは従属する異質な民族の住む空間として、支配者側の内地からの日本人観光客から侮蔑され、差別的な表象がなされる場所だったのである。

ただし、1930（昭和5）年発行の『台湾鉄道旅行案内』⁽²⁹⁾を見ると、「異国的な台湾と台湾人

(26)前掲(19)参照。

(27)高橋鏡子『女性に映じたる蓬萊ヶ島』秀陽社図書出版部、1933。

(28)台湾総督府官房調査課編『台湾現住人口統計』台湾総督府官房調査課、1933。

(29)台湾総督府交通局鉄道部編『台湾鉄道旅行案内』台ノ



図5 観光案内書掲載の台湾美人の写真
所収：台湾総督府交通局鉄道部編『台湾鉄道旅行案内』台湾総督府交通局鉄道部、1930。

の習俗」と題した巻頭の台湾案内記事において、台湾の地形や気候、そして蕃人と呼ばれた原住民の安全性や面白さを紹介する一方で、「本島人」の生活にスポットを当てて大きく紙面を割り、「台湾美人」などと称して本島人の女性の写真も掲載し（図5参照）、そのエキゾチックな魅力を強調している。このように、大稻埕こそが「城内とは甚だ違つた異国的な情趣を漂はし」⁽³⁰⁾、「千趣萬態の台湾のパノラマ」⁽³¹⁾が見られるとされた台湾エキゾティズムの中心地であったのであり、1929（昭和4）年発行の観光

案内書⁽³²⁾のように、台湾料理を食し、支那芝居を鑑賞するなどといった「大稻埕見物」がしばしば提起されていた。先の板垣や高橋といった差別的表象をなす内地からの日本人観光客が大稻埕を訪れてしまうのも、このエキゾチックな魅力故であったといえよう。すなわち、彼／女たちにとっての本島人の住まう大稻埕とは、見下し侮蔑すべきであると同時にエキゾチックな魅力も喚起するアンビバレントな他所だったのである。そのため、大稻埕は、魅力的場所として注目を集めると同時に、その表象は植民地支配を正当化し、真正なる日本人としてのアイデンティティを（再）構築するための基点の1つになっていたのだと考えられる。

また合わせて本島人街とされている城内南西側に位置する萬華（艋舺）⁽³³⁾は（図2左下参照）、台南方面から漸次北上してきた本島人と既に居住していた原住民が1730年代から共同で開墾した、台北地域で最も早い時期に開かれた艋舺であり、1820年代には、台南・鹿港と並んで「一府」「二鹿」「三舺」と呼ばれ、淡水川沿いの港として大陸との交易の中心地の一つになっていた地域である。しかしながら、次第に土砂が堆積して艋舺まで大型船が通れなくなったこともあり、その繁栄の地は、1853年のこの地での勢力争いで敗れた本島人が居を構えた⁽³⁴⁾、より下流に位置する先の「大稻埕」に移っていった。そして日本統治期に萬華と呼ばれるようになると、そこは本島人の街であると同時に、内地人の遊興地となっていたのである。その中心となったのは、「夜は歓楽境にして三階建の大力

台湾総督府交通局鉄道部、1930。

(30) 台北市役所編『台北市案内』台北市役所、1928。

(31) 橋本白水『島の都』南国出版協会、1926。

(32) 松澤聖『台湾および内地観光案内』台北活版社、1929。

(33) 清統治期には、艋舺の名で呼ばれていたが、日本統治期にはその読み方を日本語の漢字に当てはめた、萬華の名が広く流通するようになっていた。また、城内、

大稻埕、萬華という三つの地名は、行政上は1920年の市政実施に際して消滅していたが、それぞれ特徴を持った地域であったためその後も通称として使用され続けていた。

(34) 「機闘」と呼ばれる原籍地別の抗争があり、漳州人に敗れた泉州人が、既存の対抗勢力の居ない地に移住したのである。

フェー、大小料亭、花柳界、ダンスホール、大映画館と凡そ娯楽に付随したものは、総べて比の一带に集まって居る」⁽³⁵⁾とされた城内すぐ西隣の西門町界限（図6参照）と、より淡水川に近い萬華遊廓（図7参照）であった。台北市在住の橋本白水は、1926（大正15）年に著した『島の都』⁽³⁶⁾という書物において、その心象地理を以下のように記している。

台北の歓楽郷であり楽天地である西門市場付近を見物する。この地一帯は市民の遊び場所として三百六十五日肩摩轂撃人車絡繹の有様である。先ず精田公園の前からこの地付近に来ると、今まで見た城内の気分は一変する。来る人、去る人、女が多い。朝の五六時頃この辺に来て見ると、腐った鯛の目のような遊治郎が、車上恥かしげに、萬華方面から来るものがあると思へば、時にはなまめかしい職業婦人が、掻き上げたとは云へ尚二三本乱れ髪を朝風に翻らせながら屋形返りの淫らな後姿も見へる。全くダークサイトである。

台北の不夜城といへば、淡水河畔の長堤に沿ふたる萬華遊廓のことである。この不夜城の数はすべて、二十七軒、これに鎮座する女菩薩は二百四十九人を有して居る。今から七八年以前には四百五十人も鎮座ましまして居つたといふ事である。…御常連はサラリーマンが多い、専売局、鉄道部杯が先づ優なるものであらう。総督府にも随分萬華に信仰者が多いといふ事であるが、大抵は独身者である。若い法学士さんもあれば、御医者もある。或る時には高等官三等位の人が忍び行くのもある。

この地域についての内地からの日本人観光客の記述というのは少なく、またあってもあまり関心を示した形跡がみられない。本島人街でありつつ内地人の遊び場という両義的な萬華は、内地からの日本人観光客にとって、心象も曖昧で、魅力的な他所としての心象地理をなにくく、またその場所の性質から敢えて語るべきとされていないと考えられる。そこはあくま



図6 西門周辺の絵葉書

注：新世界館（映画館）



図7 萬華遊廓の写真

所収：謝森展編著『台湾回想1895-1845 THE TAIWAN 思い出の台湾写真集』創意力文化事業有限公司、1993。

で、城内に居住する内地人にとっての、欲望の投影された他所、非日常の娯楽場であったといえよう。

(3) 始政四十周年記念台湾博覧会と心象地理

次に、1935（昭和10）年開催の始政四十周年記念台湾博覧会という、台湾総督府が観光をはじめて明確に意識して実施した大規模事業に、特にその会場の配置に注目してみたい。まずヨーロッパ風の景観とされていた城内には、図8上部の第一会場と、図右下の第二会場が配置されていたが、そこでは外地を含めた日本の西洋的・

(35)前掲(21)参照。

(36)前掲(31)参照。

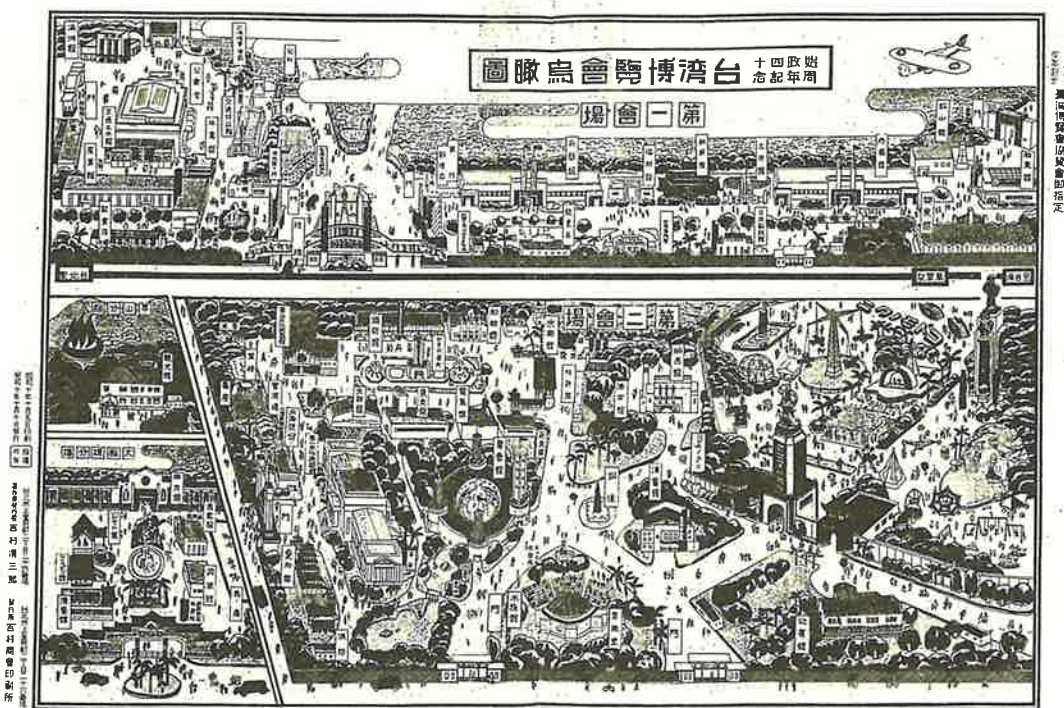


図8 始政四十周年記念台湾博覧会鳥瞰図

近代的な発展の姿を表象するパビリオンが多く集まっていた。また、図8左下の大稲埕の分場には、「エキゾチックな存在によって我等の博覧会の特異性の一半を分担」⁽³⁷⁾し「我が南方生命線の情勢を一目瞭然たらしむる」⁽³⁸⁾とされた南方館などが展示され、会場附近の街路も「支那趣味豊かに装飾」⁽³⁹⁾されていた。本島人の居住地の大稲埕には、南を喚起する心象地理と「支那趣味」に対する憧れが投影され、そこが異質な他者の空間として表象されていたのである。そして、本島人が多く居住しつつも内地人の歓楽地である萬華には、博覧会場は配置されていない。このように、先に検討した、内地からの日本人観光客、さらには台北市に居住する内地人の抱く、城内、大稲埕、萬華に対する差

異化された心象地理は、始政四十周年記念台湾博覧会において、国家のイデオロギーが投影されつつ再一表象されることで、より一層強化されていたのである。

またここでもう1つ興味深いのは、図8左中の草山分館には観光館が設置され、伊勢神宮や内地の国立公園、東京・大阪・京都の三都に、台湾の景勝地など、「一堂に雄を競ふ内台の景勝地」⁽⁴⁰⁾が展示されていたことである。草山とは、台北市北側の郊外、大屯山麓の温泉地であり、この大屯山一体は1937（昭和12）年に台湾で選定された3ヶ所の国立公園のうちの1つである。台北市の北方は、「台湾に来た者は、台湾神社に参詣せぬ中は何にも取りかかつてはならない」⁽⁴¹⁾といわれた1901（明治34）年建立の

(37)『始政四十周年記念 台湾博覧会ニュース』昭和10年6月17日。

(38)陳石煌『躍進台湾記念博 台湾風景紹介誌』台湾風景紹介誌発行所、1935。

(39)『始政四十周年記念 台湾博覧会ニュース』昭和10年9月21日。

(40)前掲(37)参照。

(41)前掲(27)参照。

官幣大社である台湾神社があり、この草山も先の板垣の紀行文⁽⁴²⁾に登場した女中が「いい所ですわ。温泉がありますし、それに春になると櫻が咲いたり、まるで内地そつくりですつて」と述べたように、内地と、さらには日本のナショナリズム高揚と関係づけられた場所であった。次章では、この日本のナショナリズム高揚と台湾の心象地理、そして観光の関係性を、台湾の国立公園選定の議論を検討するなかで考察してみたい。

IV 台湾の国立公園の風景と心象地理⁽⁴³⁾

ここで取り上げる国立公園の風景とは、「意味や価値が充たされた国土空間」たる近代性の空間を生産するものであり、それが「国家を代表する風景地」として国民とその文化にとって真正な風景として位置づけられたということが指摘されている⁽⁴⁴⁾。特に自然保護や外客誘致よりも「国民の保健教化」を主眼とした日本の国立公園は⁽⁴⁵⁾、志賀重昂が『日本風景論』⁽⁴⁶⁾において、日本の代表的風景を山岳風景とし、その風景と民族的優越性を結びつけたように、国立公園の選定においても「日本を代表する風景」として「山岳風景」を中心に選び出すことで、極めてナショナリズムと親和的な心象地理を国立公園に布置していた⁽⁴⁷⁾。日本統治期の台湾の国立公園についても、1937（昭和12）年に選定された3つの地域がすべて山岳風景地であり、まさしく日本という国土空間の象徴的生産が行われていたのである。台湾の旅行案内において

も、国立公園問題が議論され選定作業が進むにつれて、次第に本島人の紹介などによるエキゾチックな台湾といった表象がなくなり、山岳風景地としての台湾を紹介するようになっていく。1942（昭和17）年に発行された『台湾鉄道旅行案内』⁽⁴⁸⁾を見ても、「南進」の声の下で南に注目の集まった時期であるにもかかわらず、その紹介は台湾の山岳の紹介が大部分を占めていたことを確認できる。

ただし台湾は、亜熱帯及び熱帯地域に位置しており、南の心象地理を喚起する熱帯の自然風景もその特徴としていた。そのため、国立公園の選定にあたっては、様々に異なる見解が述べられ、時に意見が対立し議論が紛糾する場面がみられた。そこで、この議論の過程から、特に自然風景に関わる台湾の心象地理と、そこに投影されたイデオロギーを明確にすることが可能となる。また同時に、国立公園においては、国民の教化と二次目的である外客誘致をなすことが目指されたがために、台湾の国立公園の選定過程においても観光客のまなざしとの関係が盛んに議論された。そのため、この議論から、観光客が欲望を投影し憧れる心象地理と、国立公園の心象地理との関係性も検討することが可能となる。本章では、上記の問題を、国立公園の心象地理を論じる際の空間スケールに注目しながら検討してみたい。

(1) 台湾の国立公園の選定過程

日本の国立公園は、1911（明治44）年に帝国議会で建議が提出されて以降議論が積み重ねら

(42)前掲(19)参照。

(43)本章の内容は、神田孝治「台湾国立公園の地域選定について—国立公園の空間表象と旅行者—」、日本観光研究学会第15回全国大会論文集、2000、165—168頁。を加筆・修正したものである。

(44)荒山正彦「自然の風景地へのまなざし—国立公園の理念と候補地—」（荒山正彦・大城直樹編『空間から場所へ—地理学的想像力の探求—』、古今書院、1998）

128—142頁。

(45)田村剛「台湾国立公園の使命」、台湾の山林123、1936、6—8頁。

(46)志賀重昂『日本風景論』政教社、1894。

(47)前掲(44)参照。

(48)台湾総督府交通局鉄道部編『台湾鉄道旅行案内』東亜旅行社台湾支部、1942。

表1 台湾における国立公園設置を巡る動き

日 時	主 な 動 向
昭和3年1月	台湾総督府が田村剛に新高阿里山 一帯の調査依頼
昭和3年4月	台北州が本多静六に大屯山一帯調 査依頼
昭和6年4月	阿里山国立公園協会設立
昭和6年11月	タロコ峽中心の国立公園を期し、 花蓮港に宣伝協会設立
昭和8年9月	第一回国立公園調査委員会
昭和9年9月	第二回国立公園調査委員会
昭和9年11月	大屯国立公園協会設立
昭和10年8月	台湾国立公園協会設立
昭和10年10月	台湾国立公園法の公布
昭和11年2月	第一回台湾国立公園委員会
昭和12年12月	大屯・次高タロコ・新高阿里山の 3国立公園を指定

れ、1927（昭和2）年の国立公園協会の設置、1931（昭和6）年の国立公園法の公布と事業が進行し、1934（昭和9）年と1936（昭和11）年に合わせて12の国立公園が指定されていた⁽⁴⁹⁾。台湾の国立公園の選定及び指定も、1928（昭和3）年に国立公園選定の中心人物であった林学博士の田村剛を阿里山一帯の調査に招聘して以降、内地に於いて進行した国立公園の事業を範として非常に短期間に実行されている（表1参照）。

ただし、台湾の国立公園は内地におけるそれと違い、台湾総督府によって選定作業が行われていた。最終的に国立公園に指定された大屯・次高タロコ・新高阿里山（図9）も、台湾総督府の役人を委員とし、1933（昭和8）年と1934（昭和9）年に開催された国立公園調査委員会によって候補地として仮決定されている。そのため、1936（昭和11）年2月に開催された第一回台湾国立公園委員会においてはじめて、台湾総督府、田村剛といった内地の役人、そして台

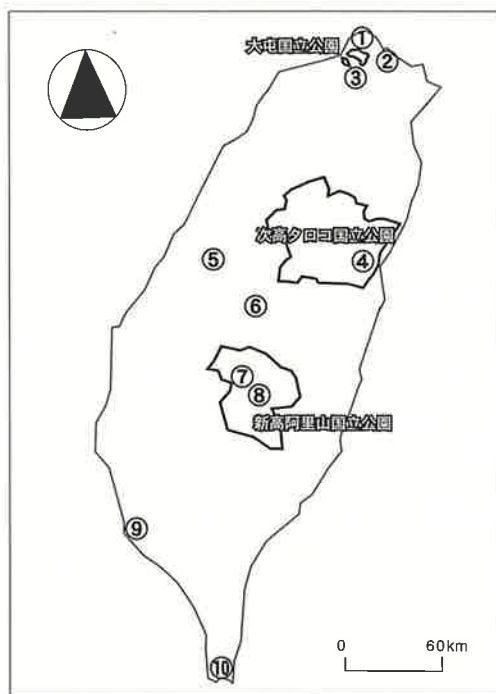


図9 台湾の国立公園と台湾八景位置図

凡例：①淡水 ②旭ヶ岡 ③台湾神社 ④タロコ
⑤八仙山 ⑥日月潭 ⑦阿里山
⑧新高山 ⑨壽山 ⑩鶯嚨鼻

注：国立公園は1937年指定。台湾八景は1927年選定。

台湾八景は、③と⑧が別格として選定されたため、計10カ所選定されていた。

湾在住の知識人が、実質的な国立公園に関する討議を行うことになったのである。

(2) 第一回台湾国立公園委員会での議論⁽⁵⁰⁾

この第一回台湾国立公園委員会は、台湾総督府総督の中川健蔵が会長を、総督府内務局長の小濱浄鑛と内務技師の田村剛が出席委員と幹事を兼ね、その他、台北帝国大学の教授などの知識人を含めた20名の出席委員、総督府事務官を中心とする8人の幹事によって構成されていた。この会議は、総督府事務官による国立公園調査委員会が決定した3候補地の提起、そして出席

(49) 指定された12の国立公園とは、阿寒、大雪山、十和田、日光、富士、日本アルプス、吉野・熊野、大山、瀬戸内海、阿蘇、雲仙、霧島である。

(50) 本節で引用されている言説は、すべて以下の書物からの引用である。台湾国立公園委員会編『第一回台湾国立公園委員会議事録』台湾国立公園委員会、1936。

委員による質疑や提案と幹事側の答弁という形をとっていた。

a 3候補地の選定理由

内地における方針に準じて、「海外に対して誇示するに足り世界の観光客を誘致するの魅力を有」した「我が国の風景を代表するに足る自然の大風景地」を必要条件として選定されたとされる、大屯、次高タロコ、新高⁽⁵¹⁾の3国立公園候補地は、表2にあるように、すべて山岳美が称揚される山岳風景地帯であった。それが全く海岸を含まない山岳風景地のみを選び出していたことは、図9の最終的に指定された国立公園地域からも確認することができる。この国立公園地域の山岳偏重は、1927（昭和2）年に台湾日日新報社が人気投票を実施して選定した台湾八景との比較からより明確となる。台湾八景では、山岳風景は別格扱いとされた新高山を加えても阿里山と八仙山の3ヶ所しかなく、残りは淡水・旭ヶ岡・壽山・鷺巒鼻の4ヶ所の海岸風景、そして溪谷のタロコと湖水の日月潭となっていた（図9参照）。国立公園候補地の選定理由に観光地としての適地である事を謳っているにもかかわらず、これら山岳以外の人気のある風景地が選ばれない理由には、まず山岳風景ありきという選定方針があったからに他ならない。なかでも台湾南端の鷺巒鼻は、台湾八景の人気投票第1位であったばかりでなく、後の中華民国政府が1982年に最初に指定した国家公园こと墾丁国家公园の中心的な風景地にもなっている。この鷺巒鼻の除外から、観光現象が附帯条件以上のものではなかったこと、そして台湾の国立公園の心象地理が当時の日本特有のものであったことを理解しうる。

b 国立公園の数の問題 [提案1]

先の総督府側の提起に対して参加委員はいくつかの疑義を呈したが、大きな提案としては国

表2 国立公園3候補地の概略と選定理由

公園名	概略と選定理由
大屯国立公園	9,350ha（日本の国立公園中最小面積）。「本島唯一の火山として優に台湾に於ける独特の風景形式」。「台湾観光客をして必ず一遊せしむる温泉地、登山地、野営地」で避暑地として適する。
次高タロコ国立公園	257,090ha（日本の国立公園中最大面積）。「水成岩及變成岩系統に属する山地として特異の風景形式を備へ本島否日本の傑出せる代表的風景地と謂ふべくその山岳、溪谷、海岸等の風景に付ては世界的特色を誇り得る」。「探勝、登山、野営、釣魚、温泉浴」が出来る。
新高国立公園	187,800ha。「最高峰新高山を盟主とする水成岩系統の頗る雄渾を極むる山地であつて、本邦に傑出せる顕著なる風景形式を有する」。「本候補地と次高タロコ地域国立公園とは略同一の風景形式に属し伯仲する大風景地」。「登山、探勝、野営、温泉浴等の外特に高地に於ける避暑に適している」。「阿里山方面は観光地として相当の設備を有する」。

立公園の数の削減を望むものがあった。台北帝国大学教授の早坂一郎たちは「似寄つた地域」である新高と次高タロコを1つにすべきと提案し、他の委員からは大屯があまりに範囲がせまき貧弱すぎないかという意見も提出された。さらに台湾新聞社社長の松岡富雄は「台湾に一つの立派な国立公園を創る、台湾の誇りを誇り度い」とし、3ヶ所もつくるのではなく「他の追従を許さない一つの偉いものを作り度い」と発言し、台北帝国大学教授の日比野信一もこの提案に同調する。日比野は1つの台湾国立公園を設定し大屯などをその特徴的な地点として紹介する方法を提案し、松岡も類似の意見を述べつつ「此の三候補地に決定をして終つたと云ふ様な事は少し早計」ではないかと苦言を呈した。

(51)新高のみ最終的に「新高阿里山」へと名称変更されている。

このような提案に対し、田村は「国内的には一つの決った一定の方針の下」で国立公園を設定する事を強調して「九州は大体台湾と似た様な面積であります、あそこに三つ」とあると、その数が妥当であるとした。ここに、台湾の国立公園に、台湾の特徴、アイデンティティを託そうとする台湾在住の知識人と、あくまで内地の延長としようとする田村剛のポリティクス、すなわち、台湾という空間スケールと、日本という空間スケールをめぐるポリティクスが展開されていたことが見て取れる。

また台湾総督府の小濱は「外客のみならず、内地の方面に向って台湾の特殊な自然の大景観を紹介したい」と述べ、「台湾には特殊の大景観が幾つもあると云ふ事が内地に対して、台湾を紹介して、台湾に対して内地の人々を牽き着ける」方策であるから、1つではなく3つの国立公園が適当であると反論している。これは、台湾という空間スケールを重視しつつ、観光客のまなざしを介して、3ヶ所の国立公園選定の妥当性を論じた異なる論理であったといえる。

c 南部地方の熱帯景観について [提案2]

しかしながら、小濱のような論理が語られたことに対して早坂は、内地から人を呼ぶために「台湾でなければ見られない所の風景、景観」が必要とし、「熱帯台湾の地理的特徴である所の熱帯景観」である「珊瑚礁」や「熱帯雨林」のある南方の恒春半島、すなわち中華民国政府が後に墾丁国家公園と定めた一帯を国立公園とすることを提案する。そして「台湾に居ります者が暑い平地に居りまして山に憧れ」るため国立公園に避暑地である山岳ばかりが選ばれていると指摘し、その考えを正すべきではないかと発言した。

このような意見に対して小濱は「台湾が暑いから山が選定されて居ると云ふ訳」ではなく、

「国民の剛健なる思想並に体育の増進」のため「内地に於きましても、割合に山が選定されて居る」と、観光客の志向ではなく人々の教化の面を強調し、田村も「天然記念物或いは名勝地、或いは観光地」のようなものまでも含めるのではないと、自然の価値や観光客の志向によって国立公園を設定するのではないと論じた。

早坂はなおも、山ばかりでなく恒春から鶯鸞鼻の熱帯風景地帯が、身体訓練にも役立ち、観光地としても人気があり、北海道の大雪山ではその地域に特徴的な氷河地形が国立公園とされているのだから、台湾も熱帯の特徴を前面に出すべきではないかと反論した。しかしながら、「特に反対の動議として成立するもの」はない、と明確な説明もないまま総督の中川は黙殺し、原案通りにこの3候補地が決定されるに至っている。

(3) 台湾の国立公園の心象地理と国家・観光・自然保護

以上の議論のうちに、国家的スケールを強調して3ヶ所の山岳風景地への国立公園設置をめざす総督府の役人と田村剛、そして台湾というスケールを強調して少数の、もしくは熱帯風景の国立公園を主張する台湾在住の知識人との対立を見て取ることができる。そして、このような意見の違いを生み出した論理を、この会議のすぐ後の1936（昭和11）年7月に刊行された雑誌「台湾の山林」の「台湾国立公園号」で展開された双方の異なる主張の中に、より明瞭なたちで確認することができる。

まず小濱は、巻頭を飾った「国立公園の使命」と題した論文において⁽⁵²⁾、「台湾の代表的風景の特徴は概ね山岳美」とあり、そこは誰しも「神韻に接し忽ちにして気宇の暢達を覚えしむ」ため、「審美的情操の陶冶に力」がある、

(52)小濱浄鑑「国立公園の使命」、台湾の山林123、1936、2-5頁。

と主張している。さらに、続いて論考を載せている田村⁽⁵³⁾は、「台湾国立公園の使命」と題して以下のように指摘している。

重点は我が国民をして大自然に接して雄渾なる気宇を養はしめ強健なる身体を練へしむるに在る。殊に台湾の平地に在住する者は気候の関係上心身共にややもすれば遅緩して生氣と活氣とを失ひ勝ちである。冷涼なる高地に転地して心身を休養せしめ、雄大豪壯なる風景に接して氣象を壮大にすることは寸時も怠つてはならぬ所と思はれる。世間動もすれば国立公園と観光地を混同しがちであるが、これは重大なる誤解である。国立公園は最も健全なる休養地であり、最も完備せる野外の運動場であり、それは最も神聖なる精神修養の靈域である。

田村は小濱と同じく、国民の精神と身体の鍛錬場としての高地を論じ、国立公園が観光地であることを否定する。このように、台湾の国立公園の心象地理とは、健全なる日本人の心身を形成するとされた、山岳風景だったのである。

一方、早坂⁽⁵⁴⁾は「台湾の国立公園事業に対する希望」と題した論文を発表し、以下のような指摘をしている。

国立公園候補地の選定に至るまでの行き方などに、種々の批評を免れがたいことがあつた…かへすがへすも遺憾なのは、日本帝国に於て台湾のもつとも特色とする熱帯的大自然景観が、各方面の学者達の極めて真摯な主張にも拘はらず、今日までまったく考慮されるにいたらぬことである。…形式と伝統をかたくなに執つて進んだ点で、台湾の国立公園の、選定の事務的過失はないであらう。けれども学術的考究の足りなかつた点については、将来の国民からの非難や批評を甘んじて受くべきであらう…アメリカはアメリカ、何もアメリカやヨロツパの真似をする必要はなからう、と云ふ議論は今日もつとも出さうな議論である。けれども、国立公園は、ただに自国民のみならず、遠く

外国からも観光客を招かんことを理想として居る。故にその施設に当つては、よほど國際的に考を練る必要がある。

早坂は、日本帝国内における台湾の特徴を熱帯的大自然景観とし、外国から観光客を招くためにも國際的なスケールで考える事を提案する。特にこれに先立つ1936（昭和11）年4月の論文「台湾の国立公園」⁽⁵⁵⁾においては、国立公園とは「大自然を保存すると云ふことが主眼である」と自然保護の重要性を全面に出して、それによって「将来の国民の enjoyment のために」なることを指摘し、真の熱帯といえる台湾南部の恒春半島を国立公園に選定する必要性と同時に、新高と次高タロコの自然地理学的類似、大屯の火山風景としての貧弱さ、国立公園専門家の山岳美への偏重、地方開発の利権屋的傾向、などを論じた。すなわち早坂は、自然保護を重視する視点から、観光客のまなざしを強調し、台湾国立公園の、さらには台湾の心象地理を熱帯に求め、3ヶ所の山岳風景地を国立公園に選定することに強烈な異議申し立てを行ったのである。

ここで田村剛の台湾の心象地理を（再）確認したい。Ⅱ章で引用した1928（昭和3）年に綴られた紀行文⁽⁵⁶⁾にあるように、彼は当初まさに台湾に魅力的な南の心象地理を布置し、そこをハワイに類似した樂園として考えていた。さらに同じ紀行文において、「…植物は風景を構成する要素の中で最も重要である。特に熱帯風景に就いて、そのことが言はれる様に思ふ。台湾を旅行した人で、たとへその名を知らなくとも、何等かの特徴を有つた、調子はずれの、呆けた様な、何処までも奇抜な姿態の少くとも二三を印象の中に止めぬ者はないであらう。」と、熱帯植物の風景を台湾の特徴であるとし、その異質な様態に関心を寄せてもいた。また、その後

(53)前掲(45)参照。

(54)早坂一郎「台湾の国立公園事業に対する希望」、台湾の山林123、1936、238-241頁。

(55)早坂一郎「台湾の国立公園」、台湾博物学会会報151、1936、182-189頁。

(56)前掲(14)参照。

1930（昭和5）年に発行された『阿里山風景調査書』⁽⁵⁷⁾においては、「南方支邦南洋地方等に対しては最も便利な位置にある唯一の避暑地」であると阿里山を賞讃し、「外国客を誘致すべく一大『ツーリスト』国を実現せしめる」ことを提起して、観光を重視する発言をしていた。

このように、熱帯風景に関心を示し、観光に注目する発言は、後の第一回台湾国立公園委員会以降の彼の発言とは大きく異なるものであった。ここに、台湾の南の心象地理にある日本人（人）にとってのアンビバレントな他性の心象、すなわち内地からの日本人観光客にとって魅力ある熱帯風景の楽園としての南の心象地理と、「ややもすれば遅緩して生氣と活氣とを失ひ勝ち」⁽⁵⁸⁾になってしまう恐怖の環境としての南の心象地理をみてとることができる。そして、観光という現状を否定してまでも守らねばならなかった、ナショナリズムと強力に結びついた国立公園のイデオロギー、さらには国立公園制度を通して国家的に台湾に布置された、山岳の心象地理、を確認することができる。

V 観光都市の嘉義と心象地理⁽⁵⁹⁾

上記のように、国立公園の選定にあたっては最終的には観光が軽視されたものの、早坂が「地方開発の利権屋的傾向」を指摘したように、そこには観光開発が密接に関係していた。実際、国立公園に指定された地域は、大屯の台北州、次高タロコの花蓮港、新高阿里山の嘉義市、といったようにすべて誘致運動を積極的に行った地方自治体を抱えており、候補地の選定作業そ

のものが誘致活動と連動する形でなされていた。特に嘉義市は、国立公園誘致運動を最も早くからはじめると同時に、観光をその都市発展の一つとして掲げていたため、日本統治期の台湾における観光と心象地理の関係を語る上で重要な都市だと考えられる。そこで本章では、観光都市を目指す嘉義市で喚起された心象地理、そしてそれに対する観光客のまなざしについて考えてみたい。

(1) 嘉義市の観光都市化への動き

台湾の南部の北回帰線近くに位置する嘉義市（図1参照）の系譜をたどると、鄭成功の時代に天興県、清朝には諸羅（後に嘉義）と呼ばれ、1895（明治28）年にはじまる日本統治期には台南県嘉義支庁、嘉義県、嘉義庁などの行政機関が置かれるなど、古くから地方の中心都市として機能していたことが確認できる⁽⁶⁰⁾。1920（大正9）年に嘉義街として台南州下の一街へと格下げされたものの、1930（昭和5）年には市政が開始され、人口57,960人を有する嘉義市となっている。

当時の嘉義市にまつわる刊行物においては、それが市役所によるものであろうと民間の発行したものであろうと、「遊覧都市」や「観光都市」などのように、観光に嘉義の都市としての性格を期待する表現が散見される。この背景については、1932（昭和7）年7月に南部無盡会社後援の下で嘉義市が募集した懸賞論文『嘉義市を繁栄せしむべき具体的方策』⁽⁶¹⁾から推察することが可能である。そもそもこの試みは、同年1月から雑誌『台湾時報』に掲載された台南

(57) 田村剛『阿里山風景調査書』台湾総督府営林所、1930。

(58) 前掲(45)参照。

(59) 本章の内容は、神田孝治「日本統治期における台湾・嘉義市の遊覧都市戦略とその条件」、日本観光研究学会第17回全国大会論文集、2002、201-204頁。で紹介した嘉義市と観光の関係性を、心象地理及び内地への

郷愁と日本人としての心身に注目して捉えなおしたものである。

(60) 林璽堅『躍進嘉義近郊大觀』台湾時代嘉義支局、1937。

(61) 嘉義市役所編『嘉義市を繁栄せしむべき具体的方策』嘉義市役所、1933。

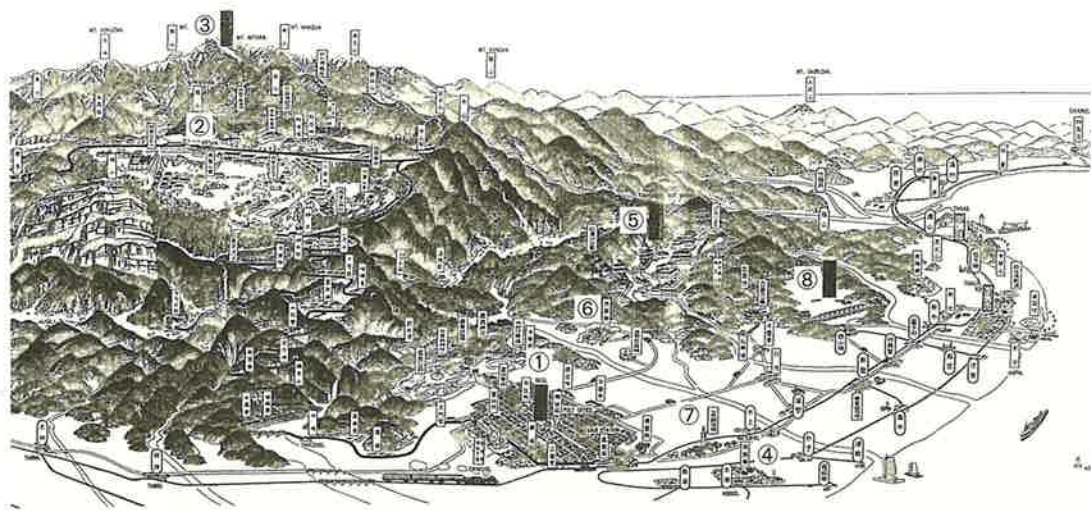


図10 嘉義市周辺の観光地絵図

凡例：①嘉義市 ②阿里山 ③新高山 ④北港 ⑤関子嶺温泉 ⑥呉鳳廟 ⑦北回帰線標 ⑧珊瑚潭

注：原図は「新高山阿里山導覧」（1933：作者不詳）の一部。〔所収：莊永明編『台湾鳥瞰図』

遠流出版公司、1996。〕

勸業協会主催の懸賞論文「台南市をして一層繁栄せしむる具体的方策」を模倣したものであったが、そこには、日本統治期に台南から台北へと政治的中心が移ったことで台南・嘉義両市ともその位置づけが相対的に低下していたこと、さらには昭和初期の大不況の中で都市の発展のあり方を模索していく必要が生じていたこと、といった時代背景が伺われる。この両市の懸賞論文を比べると、観光に関わる言及は圧倒的に嘉義市の方が多く、特に嘉義市懸賞論文の巻頭を飾った二席論文においては、地理的条件の検討を行うなかで、嘉義市の発展の方針を、「地方中心都市としての繁栄発展を主生命」に、そして「天下の絶景阿里山に接続し…南方近く峡谷温泉関子嶺及び人口大湖水珊瑚潭のあるあり、是等大景勝地は、将来国立公園たる運命を有する」がために「遊覧都市としての繁栄発展を副生命」とすべきだとし、さらに「美人を揃へ、サービスを更により良くし」て「美人郷嘉義の名を益々高からしめ、市繁栄に貢献」すること

を求めるなど、観光に力点を置く理由とそれによる都市発展の方策をはっきりと記している。

確かに、当時の嘉義の案内書を見ると、図10（図1も参照）に示したように、近隣にあるいくつかの観光の目的地が紹介されている。阿里山については、阿里山の材木を運搬するための施設として1911（明治44）年に開通した登山鉄道が嘉義市から運行していたため、嘉義市が阿里山観光の起点になっていた。さらに、北回帰線標、南部台湾第一の温泉場である関子嶺温泉、原住民の首刈を止めさせた義人を祀ったとされる呉鳳廟、嘉南大圳の貯水池で日本一の人口湖水とされた珊瑚潭、といった観光の目的地も嘉義市周辺には散在し、特に北港の朝天宮は本島人が強く信仰し参拝する媽祖廟の台湾における総本山であった。また、嘉義市周辺で操業するいくつかの製糖業者が大正中頃に好況を呈したこと⁽⁶²⁾、治外法権的で自由な雰囲気⁽⁶³⁾、などを背景にした嘉義市における遊廓・カフェー地域の発達については、「美人郷嘉義」などと称し

て多くの嘉義市案内で紹介されるものであった。都市の復興策を必要とした時代背景、そしてこのような多様かつ豊富な観光資源を有する地理的位置が、嘉義市の都市戦略に観光という発想を持ち込んだのだと考えられる。

(2) 内地への郷愁と日本人の心身

また、上記のいくつかの観光資源のなかでも注目されていたのは、国立公園に含まれることになった阿里山と、美人郷としての嘉義であったことが確認できる。例えば、当時の嘉義市のテーマソングであった「嘉義行進曲」と「嘉義小唄」⁽⁶⁴⁾は、前者の1番が「恋の 西門 色小町 ちょいと濡れたの合傘に 情つくした美人郷 美人郷」で、2番が「巡る阿里山 山の汽車 めぐる蕃社も窓の下 雲の上行く神秘郷 神秘郷」であり、後者も1番が「花が見たけりや 阿里山桜 深山さ霧に しつとり濡れて 咲いた香のよさ 色のよさ」2番が「男冥加に 一度はおじやれ 嘉義は色街 美人の郷よ 一と日一と夜さ 三味や絶えぬ」であった。特に阿里山については、台湾で最初の国立公園協会である阿里山国立公園協会の1931（昭和6）年に嘉義市役所内に設置し、官民一体となって国立公園誘致運動を展開して、タロコ峽を推す花蓮港と激しい誘致合戦も繰り広げていた⁽⁶⁵⁾。嘉義市は、1928（昭和3）年に田村剛が総督府の誘いで最初に調査した台湾の国立公園候補地が阿里山であったように、阿里山の林業が総督府直営事業であった事も背景に、総督府の方針と一体化しながら優位に誘致活動を展開していた。そして、機関誌『新高阿里山』では国立公

園選定に関わる人々の論文を多数掲載するなど、その選定そのものとも密接に関わっていったのであり、阿里山は国立公園候補地として常に嘉義市にとって注目を集める存在だったのである。その一方で、北港の朝天宮については、台湾における媽祖信仰の中心地であるにもかかわらずその紹介はほとんどなく、また阿里山の原住民を紹介する記事も非常に少ない。すなわち、日本人に台湾の他性の心象地理を喚起させるような対象は、嘉義では観光資源としてあまり注目を集めていなかったのである。

嘉義市において強調されていた「阿里山」と「美人郷の嘉義」については、先の国立公園の議論もふまえれば、聖と俗の全く相反するものであるように思われるが、実は「内地的なもの」を喚起するという意味においては共通性があった。当時、嘉義が台湾における「美人郷」と言われた背景には、先に指摘した理由の他に、「美人内地女の直輸入」といった要因⁽⁶⁶⁾があったとされ、また一部の遊廓では、大正元年頃に「客を呼ぶため内地櫻を構内に移植して大に内地気分をただよわせた」⁽⁶⁷⁾事も指摘されている。さらに、遊廓の桜を「櫻の名所にしてやらう」という意図の下で阿里山に移植すると⁽⁶⁸⁾、「三月下旬と言へば阿里山一帯爛漫たる櫻花に包まれ、母国の春を偲ぶに十分で例年続々と観櫻登山客が多数訪れて僻陬の山地にも時ならぬ賑やひを呈する」⁽⁶⁹⁾までになっていたとされる（図11参照）。また阿里山ばかりでなく、大屯の草山も、山岳風景地帯で桜が咲く「まるで内地そっくり」な場所として、台湾にきた人が一度は行くといわれていた⁽⁷⁰⁾。これらのことから、母

(62) 阿里山国立公園協会編『新高阿里山（第二号）』阿里山国立公園協会、1934。

(63) 台南州観光案内社編『台南州観光案内』台南州観光案内社、1932。

(64) 兼嶋兼福『新興の嘉義市』台湾出版協会、1932。

(65) 『台湾日日新報』昭和7年4月2日。

(66) 佐野 暹「台南市をして一層繁栄せしむる具体的方

策 [佳作ノ一]」、台湾時報149、1932、129—142頁。

(67) 近藤幸吉「阿里山の事業懐古」、台湾の山林209、1943、24—34頁。

(68) 前掲(67)参照。

(69) U 生「営林官制発布並阿里山事業創始二十五周年記念式に参列の記」、台湾の山林97、1934、84—93頁。

(70) 前掲(19)参照。



図11 阿里山の桜の写真

所収：莊永明編『台湾鳥瞰図』遠流出版公司、1996。

国である内地への憧れが観光客の誘致に重要な意味を持っており、嘉義においてもこの内地的心象地理が強調されていたのだと推察される。さらに、内地から来た日本人の女性観光客であった先の高橋⁽⁷¹⁾が、阿里山の祝山から日本一高い新高山の御来光を拝み、「神々しさにぬかづかせられ」、「富士の秀峰に似た蛤形の山頂が雲海に浮き出された姿」に「神の国を仰ぎ見る心地」がしているように、そこは、日本人たる精神を高揚させてアイデンティティを確認するための台湾における巡礼地でもあった、といえるであろう。

また、この高橋は、以下のように、阿里山の内地桜に注目すると同時に、気候と身体の問題

について言及している。

内地から移植された内地桜が内地桜そのままに、内地人の庭園に培はれ咲きそろって居ました。気候が丁度内地桜を咲かせるのに適当な温帯気候であるらしいのです。平地ではどうしても内地色に咲ないのだとの事です。小学校に通ふ子供の頬が内地色に赤い艶を見せて居るのも、気候が内地と同じ所に有る事の明かなしと申す。

このような気候と身体に関する内地からの日本人観光客のまなざしは、台湾に在住する内地人にとって重要な問題を提起していたといえよう。当時、ハンチントン（Huntington, E.）の『気候と文明』⁽⁷²⁾という書物で論じられた環境決定論は、西洋人の地理的な想像力に非常に大きな影響を与えており⁽⁷³⁾、またその思想に対して日本人も大きな関心を寄せていた。白人の熱帯への憧れを論じた先の春山⁽⁷⁴⁾も、「熱帯気候は温帯人にとっては残酷な自然の試練である」とされ、『白人の累代衰退』現象は種々の実例によって示されて」おり、熱帯における白人の子孫は「欧米人から『劣等白人種』と呼ばれてゐる」ことについて論じている。そして、台湾においては、そこに居住する内地人、特に二世の台湾在住内地人が、「湾化」という表現で、内地から来た日本人観光客に、「劣等日本人」としてまなざされていたのである。このことは、先の板垣の『台湾見物』⁽⁷⁵⁾に掲載された著者と女中との会話からも伺い知る事ができる。

「ね、このねえさんは台湾産で、まだ内地を知らないんだつてさ。でも日本語が上手だし顔だつて湾化してないね。」

「え。」

…

「湾化なんてひどうございますわ。私公学校出じやありません、先生も生徒も日本人よ。」

(71)前掲(27)参照。

(72)ハンチントン, E. (間崎萬里訳)『気候と文明』、中外文化協會、1922。

(73)前掲(10)参照。

(74)前掲(13)参照。

(75)前掲(19)参照。

...

「台湾は暑いから内地人と比べてきつと早熟だらうね。そんな事ない？」

「さあいかがですかしら、同じ日本人ですものそんな事ないと思ひますけれど。」

熱帯の環境がもたらす人種の頽廃。阿里山に登る日本人観光客は、母国への郷愁と同時に、「湾化」せず精神的にも肉体的にも真正な日本人であることを維持すべく、高山に登る必要性も感じていたことが推察される。もちろん、一時的に台湾を訪れる内地からの日本人観光客は、台湾の南の心象地理をより求めている者が多く、例えばこの板垣は、時間的制約があるからと阿里山へは行かず、最大の目的地であったとする「帝国最南端」の驚巒鼻へと向かっている。しかしながら、台湾在住の内地人には（亜）熱帯台湾におけるこの「湾化」の恐怖が常に襲いかかっており、なかでも台湾生まれの第二世代の日本人は、台湾が生み出したものとして、自分たちは日本人であると思っているにも関わらず、「湾化」、という劣化した非真性な日本人だとする、内地からの日本人観光客のまなざしにさらされがちだったのである。そのため、このような台湾在住の内地人を観光客として誘引するのに、内地的な心象地理は台湾の観光地にとって重要な意味を持っていたと考えられ、実際、嘉義市と阿里山をはじめとして、台北近郊の草山、そして国立公園などが観光地として特に人気を集めていたのである。

VI おわりに

本稿では日本人の想像力によってもたらされた日本統治期の台湾の心象地理について、特に内地からの日本人観光客のまなざしに注目しながら、台湾におけるいくつかの観光の空間において検討した。そこから台湾には、南、熱帯、ヨーロッパ、本島人、山岳、等々の異種混淆の

心象地理があり、それぞれが日本人としてのアイデンティティや心身の構築、そして日本という国家のイデオロギーと密接な関係を有していたことが確認された。

なかでも、南や熱帯、本島人といった他性を喚起する心象地理と、ホームたる日本を喚起する山岳の心象地理、もしくは日本人の位置すべき空間に投影されていたヨーロッパの心象地理との相互関係については、特に注目すべき点であったといえるであろう。前者は、観光客にとっての欲望や憧れの対象となると同時に、恐れや侮蔑の心象も喚起し、後者は、郷愁を喚起すると同時に、国家のアイデンティティを主張・確認し、日本人としての心身を構築することに寄与していた。すなわち、このような相反する性質の心象地理が交錯・重畳するなかで、魅力的な観光の空間が生み出されたのであり、またそこは台湾の植民地統治を正当化し維持することに寄与する文化的装置の役割も果たしていたと考えられる。

ただ、本稿においては、本島人といわれた漢民族、もしくは蕃人といわれた原住民にとっての台湾の心象地理の問題は検討してこなかった。彼／女たち独自の心象地理の問題と同時に、植民地に生きる住民として、日本人の欲望が投影された心象地理とどのように関係を取り結び、アイデンティティを形成していたかに関しては、ポストコロニアルの現在における台湾研究にも繋がる重要な研究課題であるといえよう。さらに、本稿では簡単にしか触れなかった、台湾在住内地人の心象地理、そしてその観光との関係についても、詳細に検討する必要があるだろう。もちろん、本稿で注目した内地からの日本人観光客の台湾の心象地理についても、さらなる資料収集等によってより精緻に考察していくことが必要である。以上のいくつかの問題を今後の検討課題として提起し、稿を閉じることにしたい。

〔附記〕

本研究は、2002年10月に開催された、大阪経済法科大学アジア研究所月例研究会（於：ISD布施）において発表したものである。本稿を執筆するにあたり、華立先生をはじめとするアジ

ア研究所の諸先生方にいただいたコメントは非常に有益なものであった。また、いくつかの貴重な資料を、東京大学大学院生の松金ゆうこ氏に提供いただいた。以上記して厚く御礼申し上げます。

